急性期治療病棟クリニカルパスの効率化に対する看護師の意識と在宅復帰率への効果を検証する

〇牛根嘉孝（Ns）

　　　松尾理恵（Ns）

　砥綿拓男（Ns）

　　　　　　　　　福岡県　医療法人　井口野間病院

**【目的】**前回の研究では、パスの活用に至らない現状がわかった。ケアこそ重視していかなければならないという観点から、今回パスをシンプルに効率化させ、ケアに時間を充てられるようにすることで、社会的入院を防ぎ、最適な在院日数につなげる。

**【方法】**まず認知症パスから急性期治療病棟としてのパスへ統一した。パスには看護ケアを無くし、看護計画のチェック欄のみを残した。更にアウトカムの代わりに別紙（別紙参照）を作成し、50日カンファ/評価を充実させた。適時、パスに対するアンケートを実施し、使用者の声に耳を傾けながら、有用なパスの運用に努めた。

**【結果】**①看護師対象の意識調査アンケート（別紙） を2018.11月、2019.4月、10月に実施②在宅復帰率や在院日数のデータを事務所の協力を得ながら収集③退院者のパスを回収し脱落化をデータ化

**【考察】**

リエゾン看護とは、人と人とのコミュニケーションを促す役割がある。パスとは、あやまちのないよう適切に介入するためのツールであることを考えると、パスを導入したことで、皆がリエゾン看護を果たせるようになったのではないかと考察する。パスは木の枝で、看護計画は木の実のようなものである。実際にケアの内容が含まれているものは看護計画である。当病棟のクリティカルパスは疾病別でも治療計画別でもないシンプルなものである。その分、専任看護師が作成する看護計画に委ねられているところは大きい。こういった場合、個別性のある看護計画、更に言えば患者様を中心に意識する看護師の熱意である。私たちは、その熱意と共に、精神リエゾン看護を目指していくべきではないかと思う。

**【結論】**

・パスの項目のうち、ケアを看護計画へ、アウトカムを別紙へ移し、ケアとアウトカムを重視し、パスはインデックス的に使うことで効率が高まり、最適な在院日数につながる。・上記の効率化により、バリアンス発生時にも問題が発生しない。・上記の効率化により退院に複雑さを感じる看護師が減少する。・上記の効率化により脱落化が減少する。８４６字